てん

てんは本州、四国、及び九州に分布し黄色のものをキテン、黒褐色のをスステンと称し前者のものは優良で後者は劣る。

この二色型の間に、ネジロ、ネアカ、ネアオ等のものがあり最後のもの程、毛皮の価が減じる。

黒テンは北海道に産し三色型があり、樺太にカラフト黒がある、シベリヤクロテン（セーブル）というソ連産が此の種で最上とせられ非常に高価であり、その毛皮は王様や貴族の世襲財産になるほどで、シベリア開発はテンを求めて進められたといわれる。北海道にもかなりいたが、乱獲でたちまち減つて絶滅寸前になつたが大正九年に禁猟になつたのと、戦争で猟が空白になつたので絶滅はすくわれたが、密猟者は絶えなかつた。大正から昭和のはじめには当時の金で一枚五百円から八百円もしたので二、三匹とれば一年分の生活に困らないといわれたのだから、密猟者の熱中するのも当然であろう。クロテンを養殖しようという試みは世界各地でされてきたが、完全に成功した例はなく、ソ連では、北カラフトのシャンタール島をクロテンの保護地として、エサを与えて自然増殖しているという。テンはリス同様、尾の毛が筆に用いられる。